

## 三浦洋

札幌のミニシアター「シアターキノ」の代表、中島洋が30年ぶりに映像作品の制作を手がけ、昨年完成させた。タイトル「Wakka」(ワッカ)は、アイヌ語で「水」を意味する。とすれば、この映画の主旨は当然、水なのか、それとも、水道管を担いで平原や森や川を巡る一人の男なのか。あるいは、自然の生命力の化身のように突如現れる女なのか。

## セリフなし

セリフのない40分の映像は、一切の説明を排して進むゆえ、見る者にさまざまな想像を許す。冒頭の吹雪のうなりや、流れる水の音が自然の声となって響くから、「聴く映画」の一面も持つと言えるか。映し出される四季の光景は、北の大地に生きてきた人々が共有する心象風景のようでもあり、自然史と生活史を黙々と刻んできた土地の記憶のようでもある。樽前放牧場、沙流川、石狩川河口、幌内炭鉱跡と、撮影場所を名指せば北の風土への郷愁が募るものの、硬派な映像表現は感傷的な物語の対極を行く。

とりわけ強い喚起力を持つ光景は、男によって地面に立

みうら・ひろし 1960年、三笠市生まれ。北大大学院文学研究科(哲学専攻)博士課程修了。博士(文学)。北大非常勤講師などを経て2009年より現職。

## 土地の記憶 水への渴望

てられた50本の水道管。中島によれば、水道管は「文明のメタファー(隠喩)」であり、ここからビル林立する都市の連想も可能だろう。しかし水なしには、水道管もビルも都市も機能しない。蛇口をひねれば水が出る生活に慣れ切った私たちは、この事実をしばしば忘れる。水道管や蛇口が汚れたら水で洗えばよいが、水そのものが汚れてしまったら何で洗えばよいのか。現代の文明は、既にこの至難な問題に直面している。

## 失った日常

2019年秋にロケ地探しが始まった本作の構想には、その前年9月に発生した胆振東部地震の体験が投影されているという。停電と断水で「当たり前」の日常を失った時間は、水の起源を探り、川辺で暮らし始めた先人に思いをはせるという着想を促したに違いない。そしてコロナ禍も、人間と自然との関係を見つめ直さざるを得ない状況を作り出した点で、何ほどか本作の主題に関わりを持つ。

何より、弛緩のない無言劇を成立させているのは、出演

者3人による「動」と「静」の対照だ。小樽出身の平原慎太郎、北見出身の大森弥子という2人のダンサーは想念を身体運動に変え、原野の空間にリズムを生み出す。あたかも身体と原野が共鳴するかのよう。一方、札幌在住の版画家でアイヌアートプロジェクト代表、結城幸司は静かな大地の守護者を思わせる存在感。また、一定の韻律で書かれた詩のように一貫したトーンの画面は、撮影監督の露口啓二の功績に帰せられよう。写真家として北海道の土地を撮り続けている露口のまなざしが、どのシーンにも感じられる。

顧みれば、古今東西の映画には水にちなむ名場面があった。夜、地面に耳をつけて漏水の音を聞く男、水中で竜神と再会する少女、「水を汚すな」と叫ぶ奇人、振り子で地下水脈を探り当てる父と、その不思議な姿に見入る幼い娘。これらは、「水」の物質性と象徴性の二重のイメージにおいて「Wakka」の主題と通底している。肥大化した文明と人間社会の問題が深刻になればなるほど、物質として命を支え、象徴として世界観を支える水への渴望は強まる。心ある映像作家たちが水源へと赴くゆえにだろう。

(北海道情報大学情報メディア学部教授)

映画「Wakka」より



「Wakka」は22日田～28日缶にシアターキノ  
で上映する。上映時間などはホームページで。21

日缶までパンフレット付き前売り券1500円を販売  
中。問い合わせは同館、電話011・231・9355へ。